

カフカの『城』：対話とアイデンティティー形成

石 ケ 森 末喜

はじめに

フランツ・カフカ（1883-1924）の『城』（*Das Schloß*）は1922年に書き始められ、1926年に友人マックス・ブロートの手によって編集、出版されたカフカ最後の長編作品である。ブロートはこの作品を寓意的かつ神学的に解釈したが、城とKとの謎めいた関係性を描く『城』は、その出版以来、宗教や寓話、官僚制などと結びつけられ、さまざまな方法で解釈され続けてきた。¹ Georg Guntermann などは、カフカによる自伝的な書き物、日記と彼の作品の親近性を論じている。² また、『城』において最も特徴的なことを挙げるならば、この作品がある程度一人称 Ich で書き進められ、その後三人称 Er へと書き換えられていることであろう。このように、『城』と彼の私生活や示唆的な改稿作業が強く引き付けて考えられるとき、ブロートの解釈をはじめとし、Siegfried Kracauer や Hans Sahl など多くの解釈者によって『訴訟』の補完編、続編とみなされるにすぎなかった本作³ は、むしろ、カフカ作品において特殊な位置を占めるものとみなすことができるのである。

カフカは生涯「書くこと（Schreiben）」というテーマに向き合っていた作家であり、日記や手紙にもそれについての記述が散見される。『城』の執筆時期のものをみると、ある問題意識がカフカの意識の表層へと頻繁に浮上していることが分かる。その問題とは、アイデンティティーの表現可能性についての懐疑である。カフカの手記からは、彼がアイデンティティーを描出不可能であると考えていたことが導き出される。そのような問題意識を背景として、主人公Kはその人物の同定が不可能な状態で城村に到着することになるのである。作中において正体不明

本稿では以下の版を使用し、次の略号と頁数で引用箇所を示す。

Kafka, Franz: *Kritische Ausgabe*. Das Schloß. Textband. Hrsg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 2002. [=KKS]; Kafka, Franz: *Kritische Ausgabe*. Das Schloß. Apparatband. Hrsg. v. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 2002. [=SAB]; Kafka, Franz: *Kritische Ausgabe*. Tagebücher. Textband. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller u. Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 2002. [=TB]

¹ これらは専ら『城』が絶望を描いた物語であると解釈しがちである。しかし、城の存在に固執しすぎなければ、この作品は未来志向的なものへと変貌をとげるはずであると筆者は考える。この点においても『城』はカフカ作品の中で特異な位置を占めるのである。

² Guntermann, Georg: *Vom Fremdwerden der Dinge beim Schreiben. Kafkas Tagebücher als literarische Physiognomie des Autors*. Tübingen 1991.

³ Müller, Michael: »Das Schloß«. In: Arnold Heinz Ludwig (Hrsg.): *Franz Kafka. Edition Text + Kritik: Zeitschrift für Literatur, Sonderband VII*. München 1994, S. 218-237.

の存在として立ちはだかる城は、K の到達可能な唯一のアイデンティティーとしてみなしうが、しかし、その城も K の意識の外へ追いやられてしまい、もはや K を同定できる要素は作中において失われてしまったように思われる。ところが、読者のうちにはページを進むにしたがって、K を K として同定することが可能になってゆくことに気がつく者もいるかもしれない。このことは、作中において、登場人物たちが互いに対話する、すなわち、相手の語ったことに対し判断を下すことによって現実の認識を更新してゆく活動とパラレルである。本論では、以上のような語りと判断の作用を、ポール・リクールの物語的自己同一性の概念を利用して検討する。そこにおいて、アイデンティティーは、他者性の中で動的に変化するものとして形成される。カフカは、語る行為による対象のアイデンティティーの描出不可能性にしか目を向けていなかったが、『城』においてはその語り及び判断という行為によって、アイデンティティーの形成がなされているのである。

1. リクールにおけるアイデンティティー

アイデンティティー⁴の問題を考えるにあたって、ここではポール・リクールの『時間と物語』及びそこで提示された「物語的自己同一性」という概念を深化させて提示した『他者のような自己自身』第5研究、第6研究を主に参照する。⁵

そもそもアイデンティティーとは何のことを指すのであろうか。我々の一般的な理解として、アイデンティティーとはおそらく「ある人がその人であることを同定できるある要素」であると言ってさほどの外れではないだろう。例えば、出自や容姿、性格などはアイデンティティーを規定する典型的な要素として挙げることができる。このような要素は普通、時間がたっても変化しないものであると理解されがちである。ところが、それは正しいとはいえない。というのも、上記で挙げた例の中でも、性格は明らかに時間によって変化するという面を持つからである。幼少期の自分と大人になった今の自分とを簡単に比較して、性格が変わっているという自覚のある人間はすくなく存在する（これはあくまで表面的な理解であり、性格については後述する）。すなわち、アイデンティティーには「変化しないもの」と「変化するもの」の二種類が存在するのである。

ポール・リクールの論じる「アイデンティティー」について言及する理由は、それが、前述の二種類のアイデンティティーの存在を明確に指摘しているからである。彼はアイデンティテ

⁴ アイデンティティー (identité) について、今回使用したリクールの邦訳では「自己同一性」と訳されるが、「同一性」との混同を避けるため、「アイデンティティー」の語を用いる。

⁵ 以下リクールについての言及は以下の邦訳を参照。

ポール・リクール『他者のような自己自身』(久米博 訳) 法政大学出版局 1996 年。

ポール・リクール『物語られる時間』『時間と物語 III』(久米博 訳) 新曜社 1990 年。

ィー (identité) を「同一性 (idem)」と「自己性 (ipse)」に分けて対置させる。人格におけるアイデンティティについてのロックやヒュームなどの見解は、「同一性」と「自己性」を区別せずに自己を求めようとしている点において批判される。前者の「同一性」は対象が「何であるか」を示す。このアイデンティティを成立させるために、我々は対象が「同じひとつのもの」であることを確認しなければならない。それらは時間の流れに伴って対象の現れ方が変化してゆくことを前提として確認されるものであり、また同時に、その中にあってもやはり変化しないものがあることを前提としている。ある人間は成長して見た目が変わっても、指紋などを確認することで同じ人間として同定可能なのである。この「同一性」に対するのが、対象が「誰であるか」を示す「自己性」である。これはつまり、ある行為をしたのが他の誰でもない自分であるということを示すことである。また、重要なことは、その行為の当事者がその行為を自ら自分がしたものとして認め、自分のものとして引き受けていることである。行動は当事者が意図しているものとなり、中止の可能性など、選択の余地が発生する。ここで、当事者にはこの行為が自分にふさわしいか否か判断することが要求され、そのとき人は自己性について疑惑を持ち葛藤するのである。アイデンティティのこの側面に着目するとき、人は自ら選択して古い自己性を捨て、新しい自己性を獲得してゆくことになる。すなわち、「同一性」に対し「自己性」は時間の流れとともに常に更新されてゆくことが前提とされているといえることができる。

これら二つのアイデンティティが交わる人格的アイデンティティの代表的なありかたとして提示されるのが「性格」である。性格はなるほど「個人を同一人物として再同定するのを許すような弁別的しるしの集合」⁶ である。したがって先に言及した同一性の特徴を持ち合わせているようにみえる。しかしそれは同時に「性向の集合」⁷ である。「性向」はある特定の時間に突然獲得されるものではありえず、時間をかけて形成しなければならない点で、自己性の特徴を持ち合わせてもいるようである。リクールはこの傾向性に二つの構成要素を見出す。一つが「習慣」である。傾向性はそもそも、比較的安定した感覚、知覚、行動、思考の仕方である習慣として、外的な理想をもとに獲得されるものである。時間において恒常性を持つ一方で「私自身」である性格は、「自己」でありながら「同一」である。また、もう一つの要素として挙げるのが「自己同定」である。これは、理想的な他者のように自分を形成しようとする働きである。これらはいずれも外部から自分が魅力的だと考える他性を引き受けて内面化することであり、新しく形成され続けるものなのである。したがって、性格は、ある人物がその人物本人であるという同一性という側面を持ちながらも変化を続ける自己性としての側面も併せ持つ。現実の問題として、性格としてあらわれるアイデンティティをみればわかるように、我々の

⁶ リクール (1996)、154 頁。

⁷ 同上、155 頁。

人生の歴史について考えるときに、どれが同一性の問題でどれが自己性の問題かをはっきりと識別することは難しく、アイデンティティーはその二つの間を揺れ動くことになる。

まず、ここまでの議論をふまえて浮上してくるのは、リクールの考える個人のアイデンティティーにおける「他者」の重要性である。自己の成立には他者が不可欠な仕方がかかわってくる。松尾憲一は、リクールの自己性について解釈する補助線として、リクールにおける自己性の探求を「ほんものの自分」の探求と読み替えたうえで、チャールズ・テイラーの「ほんもの」についての論に言及する。⁸ 「ほんもの」の探求とはすなわち他者とは異なる自己の独自性の探求である。ただしこの探求は、「対話を通じて他者と共有されうる、重要な価値についての意味の地平を背景として行われる探求」であり、その結果得られた独自性は他者からの承認があってこそ真に重要な意味を帯びるのである。すなわち、アイデンティティーは自己の偏狭なこだわりであってはならず、他者の求めに応じて柔軟に変化させ、場合によっては放棄できるようなものであらねばならない。

以上のことから導かれるように、このように揺れ動くアイデンティティーを一言で言い表すことなど到底できない。したがってアイデンティティーは物語られることによってしか明確なまとまりをもつことができないことになり、物語的自己同一性の概念が次なる議論の対象として浮かび上がってくる。物語的自己同一性は「不調和の調和」⁹ を経て形成される。物語の働きは、不調和の調和と呼ばれる、まとまりのない出来事を筋立てによって統合することである。筋立ては偶然性であった出来事とストーリーとを媒介し、物語として「統合形象化（configuration）」¹⁰ することで必然性を、そしてひいては物語全体の調和を作り出すことができる。このような調和はしたがって、物語中の出来事に導かれた時間の進行によって形成される筋立てによって達成されるということができる。リクールによれば、物語の登場人物は物語の筋と循環的な関係にある。というのも、登場人物の行為を物語の筋とすることで、同時にそのような行為の原理としての彼ら自身を形成することになるからである。このような操作を通じて物語におけるアイデンティティーは「力動的な自己同一性」¹¹ となり、ここでは一般的に一貫性を意味するであろうアイデンティティーと多様性という一見すると不調和なものが和解することができるのである。ただしこのような物語において実現されるアイデンティティー（物語的自己同一性）には制限がある。一つには、これまで論述してきたように、これが決して首尾一貫した同一性ではないことである。二つには、これが主体の自己性をめぐる問題をすべて

⁸ 松尾憲一「〈自分らしさ〉の探求としてのアイデンティティ：ポール・リクールのアイデンティティ論」：『東京大学大学院教育学研究科紀要』45号（2006年）、31～39頁所収、34頁。

⁹ リクール（1996）、183頁。

¹⁰ 同上、183頁。

¹¹ 同上、184頁。

解決することはないということである。これらのことは、アイデンティティーをめぐる探求には終わりが無いことを示唆しているのである。

2. カフカにおける「書くこと (Schreiben)」

カフカにとって、「書くこと (Schreiben)」が彼の本質に決定的にかかわる行為だったということはカフカ自身の手記によって、そして数多くの先行研究において明らかであるが、本論では、語る行為 (Erzählen) によるアイデンティティー形成について論じるために、それと緊密な関係にあったと考えられるカフカの「書くこと」に対する見解をその糸口とする。¹²

カフカが自らの「書くこと」の不可能性について、それをしばしば自らの身体的不遇や環境的不遇に結びつけることは、彼自身の手記や多くの先行研究においても指摘されてきたが、その一方で、「書くこと」の不可能性のうちでもその描出不可能性を表したのものとして、カフカは『城』の執筆開始直前である 1921 年 12 月 6 日の日記に、とりわけ興味深い記述を残している。

書くことの自立性のなさ、部屋を暖めている女中やストーブのところで暖をとる猫、ぬくもっている衰れた老人たちに依存していること。これらのものはすべて自立し、自分の法則にしたがっているが、書くことだけが救いがなく、自分自身の中には住まわず、冗談であり絶望なのである。(TB 875)

ここにおいてカフカは「書くこと」の無意味について述べる。注目したいのは、カフカが「書くこと」という語に、単なる身体的環境的不能を超えた意味を付与していることである。彼はこの語を「行為」としてでなく、ある出来事の描写の意で用いている。これは、その際に対象が「自立し、自分の法則にしたがっている」ことに注目していることからうかがえる。「書くこと」は対象を文字として可視化することには成功しているように思われるが、対象がその中に含んでいる本質的なものを受け継ぐことはできない。「書くこと」は「冗談であり、絶望」なのである。同時期に文通をしていたチェコ人のミレナ・イエセンスカに対し、カフカは同様の意図でもって次のような手紙を送っている。そこではこのような「書くこと」の不遇が、対象のアイデンティティーの表現不可能性としてより先鋭化された形で表現される。

¹² カフカは自身が文学 (Litteratur) そのものであり、作家は天職であると書き残している。彼は「語ろうとする (erzählen zu wollen)」という点において十分作家なのである。作品をはじめとした膨大な数の手記を残している彼にとって、この作家という職業と語る行為 (あるいは何かについて書くこと) とは彼の精神生活を考えるうえで切っても切り離せない関係にあったに違いない。Vgl. Kafka, Franz: *Kritische Ausgabe. Briefe 1913-1914*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. 1999, S. 261; Kafka, Franz: *Gesammelte Ausgabe. Briefe 1902-1924*. Hrsg. v. Max Brod. New York. 1958, S. 385-386.

というのも、マックスがしきりに君のことを聞いてくるんだ、君は元気か、何かあったかってね、それで心の中であらゆることを気にかけている。でも僕は彼にほとんど何も言ってもやれない、幸いにも、言葉のほうがかれを拒んでくれる。だって、ウィーンにいるミレナという誰かについて語って（*erzählen*）、それからその「彼女」があれやこれを考えてたり、言ったり、やったりしたなんて言うことはできないから。なにしろ、君は「ミレナ」でもなければ「彼女」でもない、そんなのはまったくのナンセンスだ、だから僕には何も言うことができない。これがあまりにも当然すぎて、申し訳ないとさえ思わないよ。¹³

ここにおいてはより明確な形で、ある対象の描出不可能性が述べられている。すなわち、書き下ろされたものは言葉という形で対象を表現しているように思われるが、それは対象の本質を表してくれるものではない。その問題に直面し、カフカにはミレナがいかなる人物であるか、その行動や思考がどのようなものかを語る（*erzählen*）ことは全くできないのである。カフカはミレナについて書くことすら拒否する。この手紙においても同様に書かれたものの無意味が語られていることが分かるが、先の日記の記述と比較してはつきりと強調されることがある。それは、「ぬくもっている哀れな老人たち」をはじめとした例が単なる情景描写である一方で、ミレナの描写は人物の特徴の描写であるということである。カフカがミレナという人物を描写するには、書き手カフカ自身がミレナをどう思っているかという問題を避けては通れない。すなわち、カフカがここで「語る（*erzählen*）」という語を使用するとき、彼は自分の対象への評価を暗に含ませていることになる。もちろん単なる情景描写においてさえも書き手の解釈は必要であるが、ミレナの場合と比べてその比重は少ない。

ただし、語る行為におけるこのような対象のアイデンティティーをめぐる問題を意識しつつも、カフカは自分が「書くこと」ができることを皮肉ともとれる口調でこう述べるのである。「ただこのように書けることは間違いなくある種の幸福である。「窒息は想像もできないほどに恐ろしい。」もちろん想像はできないし、だからまたもや何も書かれていないわけなのだ」（TB 876）。カフカはここで「書くこと」が存在しない架空の対象に対しても有効であることの幸福を述べるが、しかしそれはそもそも「書くこと」が対象の本質を表現しえないことを前提としてなりたつといえよう。その対象を記述するにせよしないにせよ、そこに本質は存在しない。これは、カフカの創作活動の追い風になっているといえるだろう。いずれにせよ、カフカは自分が書いているものに本質が宿っていないという意識を持っていたのである。

以上であげたように、カフカが何かを言い表すときには対象の判断（評価、*urteilen*）が大きな役割を果たしていると考えられることができるが、このような評価行為自体の危険性についても

¹³ Kafka, Franz: *Gesammelte Werke*. Briefe an Milena. Hrsg. v. Max Brod. Frankfurt a. M. 1958, S. 132-133.

カフカは日記の中で指摘する。職場の同僚に今までに知らなかった一面を見て彼はこう述べる。

瞬間の気分に働いたり、さらにその気分の中で働いたり、ついには評価の中で働いたりするようなあらゆる事情に気付いて評価をするのは、絶対に不可能である。だから、ぼくは昨日は安定している気がしたが今日は絶望している、というのは間違いだ。このような区別は、自分に影響を及ぼして自分からできるだけ離れ、先入観や空想の後ろに隠れて、一時的に人工的な生活を送りたい、という気持ちを持っているということを証明しているにすぎない。(TB 609)

評価行為は、あらゆる状況を加味し、多角的に行う努力がなされなければならない。しかし、これは不可能であり、人は実際「自分 (ich)」として一面的に評価を下してしまう。これは「間違い」である。そのような評価により、人々は自分の生活を人工的に作り上げ、現実から逃避してしまうのである。カフカはここにおいて明らかに、そのような一面的な評価に対する嫌悪を示している。例えばここで、瞬間の気分に働く事情について述べるとき、我々は自分の気分 (Stimmung) だけでなく、そこに影響する周囲の環境なども考慮に入れるといえる。つまり、ここで、「あらゆる状況」というのは、明らかに「ぼくは昨日は安定している気がした」というときの「ぼく (ich)」を越えた、他者的な意味を含んでいるだろう。このことは、リクールが物語的自己同一性の重要な要素として他者性を經由させることと無関係ではない。ある一定以上の時間的長さを持つ事象に対して、我々がある判断を下すとき、それはその時間内の筋書きにおける一貫性を加味しているということである。すなわち、「昨日は安定している気がした」とは、「昨日 (gestern)」という時間の中で「私 (ich)」が「安定している (sich gefestigt)」という一貫性を持っていたと語り手が考えている、と説明することができるのである。このように、カフカは何かについて言い表す際に必要な判断について、それがひとりよがりになってしまうことを危惧していたのであった。

ただし、カフカによるこの語る行為の解釈には問題点がある。先に見てきたように、リクールの見解によると、何かについて言い表すこと、すなわち物語ること (erzählen) にはアイデンティティーを表現するだけでなくそれを形成する作用もある。カフカがこの作用を少なくともこの時点においては見落としてしまっているように思われるということは、『城』におけるアイデンティティー形成の問題においてひとつの重要な要素となるのである。このことは、先に『城』の特徴として指摘した一人称の語りから三人称の語りへの書き換えの意義、及びそれと同時に創造されることとなった主人公 K のアイデンティティー形成について考えるときの道標となるだろう。

3. 『城』における現実認識

『城』の登場人物について、誰が何を現実（Wirklichkeit）として受け取っているのかについて考えることは、結局彼らが自分のあるいは他の登場人物のアイデンティティーについてどう考えているかということと密接な関係にあるだろう。したがって、これ以降は彼らのアイデンティティーについて考えるうえで、作中における「現実（Wirklichkeit）」の扱われ方にも注目してゆく。

Beißner はカフカ作品の語り手を、経験を経た主人公の内面世界を物語る「単視点的（einsinnig）」な語り手と定義した。したがって、少なくとも地の文で語られる現実には K の視点を通したものとなる。すなわち、K は自らが知覚したものを受容かつ評価し、それを現実として我々に提示してくる。それは K がクラムからの一通目の手紙を読む場面にすでに明確にあらわれている。K はクラムから届いた自分の雇用を認める書簡をバルナバスから受け取り、最初はその文面を書いてあるまま読み上げるのみである。手紙はそもそも送り手が一人あるいは複数の受け手を想定し、その人物に宛てて書くものである。したがって、そこには送り手と受け手との関係性が反映され、その内容は、その特定の人物による解釈を前提として書かれたものとなるはずである。したがって、手紙は受け手の解釈を免れえない。一度目はその文面のみが提示された手紙だが、K が自室へと帰ると、手紙は再読され、逆にその手紙に対する K の解釈のみが提示される。

それよりもむしろ、K はこの手紙が自分に対してある選択の自由を提供しているということを読み取った。この手紙の指令をどのようにうけとるか、つまり、城との間にかくも特別な、しかし、実は外見上だけの関係を持つにすぎない在村労働者になるか、それとも、外見上はただの在村労働者であっても、実際はそのすべての仕事をバルナバスの報告によって決定されるようにするか、そのいずれを選ぶかは、K の自由にまかされているのである。（KKS 54）

ここで、K は手紙の記述から自分が読み取ったことを、はっきりとした事実らしく受け取る。伝達動詞を用いないことで、K の思考が読者に対しより直接的に提示される。K と地の文の話し手の発言は、ここにおいて一体となるのである。しかし、この「事実」の様相を帯びた文章は、あくまで K の解釈の産物にすぎない。Jürgen Steffan は以上のような K の手紙を解釈する能力について次のように断言する。

このように手紙をあらゆる特定の解釈から切り離すことは、それらの情報を含む内容を破壊することである。すなわち、これらの手紙はあらゆるものを意味するし、何も意味しない

いということである。事実に即した報告を含む必要はない。ほんとうに想定されていたことは、手紙の内容から導きだすことはできない。したがって、手紙の内容はその意味に対するヒントにはならないため、手紙のいかなる解釈も正当化される。よって、受け手は手紙の内容を自由に解釈することができるのである。¹⁴

したがって、彼は、『城』の手紙において内容は特定の解釈から解放されるため、K が完全に任意に手紙の内容を解釈できるとする。このようにして、K は作中の事実を自らの解釈にしたがって構成し、提示するのである。このような手紙の解釈は同時に K と城との関係性の、そして城へと向かう K の暫定的なアイデンティティーの根拠づけにもなっている。

K と「対象の評価能力」を結びつける研究はすでに大量に存在する。Wilhelm Emrich は K の測量師という職業に注目し、それを「再検査」という革命的行為と結びつけた。¹⁵ また、Michael Müller や Constanze Busse などは K が持つ、現実を「解釈 (interpretieren)」あるいは「意味付け (deuten)」する能力を強調する。このような見方は、『城』において世界は K によって新たに解釈、評価されるという点においてバイスナーの流れを汲み、発展させているが、二つの新たなポイントを交えることで再考するに値するものである。一つ目は、世界を評価しうるのが必ずしも K だけではないということ、そして二つ目は K もまた評価される存在であるということである。例えば K に届いた手紙に対して様々な登場人物が多様な解釈を加えるように、『城』において、他の事象、人物の評価は語り (erzählen) という行為により K を含む登場人物全員に等しく起こりうる。K はそのような現実の解釈を批判し、また他の登場人物も、K の現実の解釈を批判するのである。よって、作中において、解釈は決して一方的な行為でも、主人公 K の特権でもない。それは、K が規定する場合だけでなく、K を規定する際にも働いているのである。

次に、『城』において「事実」が登場人物間でそもそもどのように扱われているかみてゆく。この作品においてはある情報、すなわち他の登場人物が認識した現実の伝達のされかたに三種類あることに我々はすぐに気がつく。すなわち、調書によるもの、手紙によるもの、口述のものである。それらは一見書面のものと口頭のもので分類できるように思われるが、もう一つの側面に目を向けると別な切り口が見えてくる。それは、語りの担い手に対し、その受け手が自分の解釈を述べることができるか否かである。つまり、口頭によるものは相手に対する即座の返答が可能であり、また、手紙も受け手の返信を前提として書かれ、実際その内容は受け手

¹⁴ Steffan, Jürgen: *Darstellung und Wahrnehmung der Wirklichkeit in Franz Kafkas Romanen*. Nürnberg 1979, S. 109-110.

¹⁵ Emrich によれば、K は城の反対派によって招聘された、クラムへの抵抗を意味する測量師として、城の土地を再検査する役割を持っている。この行為はすなわち、城によって行われる、すべてのものの規定への反抗、再評価である。ヴィルヘルム・エムリッヒ『カフカ論 1 蜂起する事物』(志波一富／中村詔二郎 訳) 冬樹社 1971 年。

によって返信される。ところが、調書は書き手から発信されたあと、それに対する反応を発信者は関知しない。調書はある事象の報告書にすぎないのである。したがって、会話と手紙においては双方による応答が行われるため、それらは相互関係的な媒体だが、調書においては一方的な提示に限定されるのである。ただし、このような分類は、一般的な手紙の理解に基づくものである。『城』においては、手紙はそのような一般的なものと異なる地位を手に入れる。『城』の作中において K は二通の手紙を受け取ることになる。それらはどちらもクラムからのものであり、一通目は K が城の雇われたことを認めるものである。K は自分が要求どおり城に雇われたことを喜び、手紙を持ってきたバルナバスに、それに対する返事の言付けを頼む。

「わたしは」バルナバスは言った。「ただ手紙を手渡し、読むまで待ち、お望みの場合には口頭か文書によるお返事を持ち帰るように言いつけられただけなんです。」「いいだろう」K は言った。[...] 「それではクラムさんに採用と特別なご厚意に対するお礼をお伝えしてくれ」。(KKS 45)

この一通目の手紙においては、それに対する応答が可能のように思われる。したがって K も何の疑問も持たずに彼に伝言を頼むのである。続いて届いた二通目の手紙は、K の測量師としての働きを称賛するものであった。ところが、作中において K は一度も測量行為を行うことはない。したがって、これは K が実際には行っていない業務に対する称賛である。K は当然それに対する反論を口にし、この反論をクラムへと伝えてもらおうとする。しかし、K はバルナバスから手紙の返事の扱いについて驚くべき事実を聞かされる。

「わたしはこのことを確かにお伝えしましょう、そして前回あなたが言付けたことも確かにお伝えします。」「なんだって！」K は叫んだ。「おまえはあれをまだ伝えていなかったのか [...]」「クラムは報告をちっとも待っていないのです、それどころか私が入っていくと腹を立てるのです。一度なんか「また新しい報告か」と言ったり、遠くからわたしが来るのを見つけると立ち上がって隣室に閉じこもり、私に会ってくれません」。(KKS 189-191)

この会話では、クラムから K に渡される手紙においては手紙の持つ相互指向性が失われていることが分かる。バルナバスはこの伝言を両方クラムに届けることを約束するが、物語の筋書において、バルナバスがその答えを携えてクラムへと接触したかは不明のままであり、バルナバスも K のもとへは帰ってこない。クラムが解釈した現実、K の反論を許さず、事実として押し付けられるのである。K はそこに介入することができない。K は実際すでに学校の用務員と

して働き始めており、もはや測量師ではないにもかかわらず、測量師と呼ばれ続けるのであるから。

このような一方的な現実の押し付けによる被害を受けたのが、バルナバス一家であるといえよう。クラムからの報告を待ち切れずにバルナバス家へ訪ねて言った K は、そこでバルナバス家の娘オルガとアマーリアと会話する。そこで彼はバルナバス一家がかつては名望ある一家であったが没落し、その末弟であるバルナバスが城の小間使いとして働くことに一家復活の希望を託していることをきく。バルナバス家が村から疎外された理由として考えられるものとして、オルガはアマーリアと城の役人ソルティーニとの確執に言及する。父親とともに盛装して消防団の式典に出席したアマーリアはソルティーニから求婚の手紙を受け取る。その下品な口調の求婚の手紙は「だから、すぐに来るか、さもないと——！」(KKS 303)と結ばれていた。ここにおいてもふたたび『城』において特有の手紙の問題が浮上してくる。すなわち、この手紙の書き手であるソルティーニは、アマーリアが手紙の現実を受け入れ、自分のもとへ来ることを分かっていたのである。なぜなら、「お役人が失恋するなんてことはありえない」(KKS 310)から。よって、ここにおいてもまた、K の場合と同じように手紙への返信は役人に届かないことが前提となっている。しかし、アマーリアは手紙を破りすて、窓を閉めることによって、この手紙の内容に対し拒絶という返事をしてしまった。『城』の世界における手紙の規律を侵してしまったのである。ただし、この事件はアマーリアと彼女の家族が村から疎外されたことの直接的な原因とは考えにくい。城は事件の存在そのものを閑知していないかのようにふるまうだけでなく、オルガが、自分たちが疎外の対象となった原因について次のように分析しているからである。

その際問題となったのは、わたしたちの一家ではなく、この件だけであり、わたしたちは、事件の渦中にいたがために問題になったにすぎませんでした。(KKS 329)

したがって、オルガによれば、事件そのものは疎外の原因ではなく、より本質的な問題として次に浮上する問題は、事件に対するバルナバス家の人間と村人の反応であるといえよう。オルガは、村八分が始まった発端として、村人の間に事件が広まったということを挙げる。彼女によれば、村人たちはこの事件について詳しいことを閑知してはいなかった。村人たちは彼らの間で共有された、バルナバス家で事件があったという事実を受容した結果、バルナバス家を疎外したのである。もちろん一家は村人のこのような理解に反論できるはずであった。

わたしたちが不意に出かけて行って、全部大丈夫だと言うか、たとえば、これはある誤解にすぎなくて、その後すっかり氷解したとか、確かに過失があったが、すでに行為によっ

て償われたとか、あるいは、これだけでも十分だったと思うのですが、わたしどもがお城に持っているコネのおかげで首尾よく事件をもみ消すことができたとか言っていれば、みなさんはきっとわたしたちを腕をひろげてむかえてくれ、接吻やら抱擁やらでお祭り騒ぎになったことでしょう。(KKS 328)

オルガは、当時村人の間に広まっていた「事実」を、直接会話によって反論し、新たな事実を提供することで抹消、あるいは更新できたことに気が付いていた。実際オルガもそのような場面に数回出くわしたことがあると述べる。しかし、問題は、実際バルナバス家がそのような行動に出なかったことにあるのである。渦中のアマーリアは「ただ沈黙する」(KKS 331) だけであった。よって、バルナバス家はこのような一方的な事実の解釈に甘んじ、沈黙を貫き通した代償として身をやつしてゆくのである。

ここまで確認してきたように、K の現実を解釈する能力は、グラムからの手紙を読む場面においてすでに明らかである。彼はここで、自らの手紙解釈を、それがまるで「事実」であるかのように読者に提示してくる。このようにして、K は世界を解釈するのである。ただし、現実の解釈は決して K だけの特権ではない。『城』においては口頭での会話、調書、手紙という三種類のツールによって「現実」の解釈の共有が図られる。ところが、調書と手紙についていえば、それらは一方的な事実の提示という機能しか持たない。最も悲劇的な運命をたどるバルナバス家は、そのようなコミュニケーションツールによる事実の扱われ方の違いの弊害を受けたのである。このことは、否応なく K のアイデンティティーの扱われ方にも関係してくる。そのことを如実に表してくれるのが、以下でみてゆく「モムスの調書」の場面である。

4. 「モムスの調書」とアイデンティティー形成

「モムスの調書」について論じる前に、以上のような問題意識を持っていたカフカが設定した『城』の主人公 K はそもそもどのような人物であるのかを確認する。多くの先行研究において指摘されているように、まず何よりも、K という名前は他の二編の長編作品の主人公たち、『失踪者』のカール・ロスマンや『訴訟』のヨーゼフ・K と比べて、個人を特定する働きがあまりにも少ない。また、彼の名前を筆頭とした彼のプロフィールから K の同定が不可能であるのは、それらに互いに矛盾する要素があまりにも多く含まれるからである。したがって、K はカフカの手によって同一人物の同定が不可能な状態で村に到着することになる。K はのちに橋亭のおかみガルデーナが呼ぶことになるように、文字通り「何者でもない (nichts)」(KKS 80) ののである。この K という登場人物は、先に述べたように Ich から Er への移行と同時に、すなわち語り

手が主人公を名指しし名前を与えることではじめて姿を現す。¹⁶ 特徴的なことに、彼は提示される情報によって個人を同定することが全く不可能なキャラクターなのである。この書き換えは、物語の様相を変化させた最大の転換点であることは言うまでもなく、書き手カフカによるほとんど唯一の『城』の構想変更であるといえる。カフカが意識していたアイデンティティーの表現不可能性が、このような「表現できるアイデンティティーを最初から用意しない」というシンプルな図式で書き表されると、Kの「独自の法則に支配された働き」(TB 875)はどこに表現されるのだろうか。

このように、カフカはKからも、いわゆる語り手からもアイデンティティーを剥奪した状態で『城』を書き進めていったが、Kは物語の序盤において唯一無二の地位をすでに獲得していることに我々は気がつく。すなわち、Kは作中において常に城を目指すと思われるという点で他のキャラクターと決定的に差別化されうることである。最初期の『城』解釈、例えば Siegfried Kracauer の解釈によれば、『城』は明らかに神の運命決定に対する人間の態度を表している。つまり、人間が真実から、すなわち城から締め出されているのである。Kは確かに村への到着の翌日にすでに城への物理的接近を目指すほど城への執着があり、結局はそのようなやり方での城への到達を断念せざるを得なくなる。このような潮流の中で、初期の『城』研究においては城の存在を解釈の中心に据えることに固執するものも目立っていた。すなわち、何者でもない存在である主人公Kが、自らの根源、よりどころを求め、城へと到達する方法を模索し、そして失敗しているように見えるのである。Kはこの行動によってひとまずは「城へ向かうとする人間」というアイデンティティーを手に入れたように思われる。当時アイデンティティーの表現不可能性について強く意識していたカフカが、Kを取り巻く環境を意図的にこのように構成したのは裏付けが不可能である。しかし、『城』の研究史においてはこのように城をKのテロスとする見方がマックス・プロート以来の伝統として存在し、実際作中においても筋書の序盤においてはそのような見方をすることができる。

このような傾向に異を唱えたのが Ingeborg Henel である。彼女は、プロートをはじめとした研究者が未知の権力に固執しそれを特定しようとするあまり主人公の分析をおこたっていることを批判した。¹⁷ 確かにKは城への徒歩での到達の場面でこそ城をはっきりと視認し、直接の接近を試みるが、筋書にしたがえば、批判版全集の第8章の時点ですでに、城はKの視界からも眼中からも消えうせてしまう。

¹⁶ 『城』に特徴的なこの事実は Franz Stanzel によって「語り手 (Erzähler) から映し手 (Reflektor) への移行」と形容される。すなわち、人格のある語り手からKの現実を映し出す「鏡」への移行を示し、Beißner に代表されるカフカの語り手問題を、語り手の人格の有無の領域まで深めたのである。Stanzel, Franz K.: *Theorie des Erzählens*. Göttingen 1979.

¹⁷ Henel, Ingeborg: Die Deutbarkeit von Kafkas Werken. In: Politzer Heinz (Hrsg.): *Franz Kafka*. Darmstadt 1973, S. 406-430.

すでに輪郭がぼやけ始めていた城は、いつものように静かにそこにあった、Kは今まで一度たりともそこに生きている印をみたことがなかった、おそらく、この距離からでは何かを認識することは全く不可能なのだろう、[...] この印象は、早めの日没のせいで今日はおさら強まった、彼が城を見る時間が長くなるほどにそれは見えなくなってゆき、ますます深くすべてが夕焼けの中に沈んでゆくのだった。(KKS 156-157)

この場面において城はぼやけて消え去り、以降城をはっきりと視認できる場面は二度と訪れない。また、Kは学校の用務員として働き、フリーダとの家庭を持ち、村の住人との人間関係を構築しようとする。そして、オルガとの会話の場面においてオルガに放ったこのセリフは、Kがすでに城への到達ではなく村への定住を主眼に置いていることをものがたっている。

ぼくは、どれもたいしたことではないかもしれませんが、それでもすでに一家をかまえ、職をもち、れっきとした仕事をしています。それに、許婚もいる。ぼくはそのうち彼女と結婚し、村の一員になるでしょう。ぼくはさらにグラムと職務上の関係だけでなく、個人的な関係もある。(KKS 313)

すなわち、『城』は、城の存在だけでなく主人公Kにも焦点を置くことによって、村の人間関係の中で生きていこうとするKを描いた話とも解釈できるのである。確かに、Kが城をはっきりと視認できるのは到着日の翌朝だけであり、小学校の用務員として働き、村へ定住して村人の一人となることを決めたKの目には、城はもはや「ぼやけた輪郭」としてしか映らない。以降、『城』においてアイデンティティーの可視化としてみなされた城は作中ですっかり影を潜めてしまうのである。物語の展開にしたがう城の役割の変化を、プロットをはじめとした研究者たちは軽視してしまっているといえよう。『城』作中において城の存在がKのアイデンティティーを保証しているようにみえることはすでに述べたが、では、城がそのような作用を失ってしまうことがわかったいま、Kのアイデンティティーは失われてしまったのだろうか。

ここで、削除された異文のある箇所を引用したい。ページの中頃から **Kapitel** という章付けがなされたあと始まる。この独立した場面は、批判版全集の第9章の終盤にあたる内容として書かれたもので、第10章となるはずだった。ところが、写真でしめされるように、カフカ自身の手によって大規模に線を引かれ、削除されている。批判版全集の第8章において、Kは城の役人グラムが橋亭に宿泊しているとき、接触を目指して出かけてゆく。グラムが乗る予定のソリに乗り込んでグラムを待つがグラムは現れず、Kが少し場を離れた隙にグラムは出発してしまう。第9章は、ソリでのグラムとの接触に失敗したKが、橋亭で待っていた村秘書のモムスと話す場面である。Kは自分についての報告書が存在することを知り、モムスから無理やり

奪い取ってこれに目を通す。¹⁸

「測量師 K の罪を証明するのは簡単ではない。というのも、それがどれだけ不快なことであろうとも、彼の思考回路に自分を完全にはめ込んでしまうときにのみ、彼の計略を見抜くことができるのである。[...] フリーダの場合を例にとってみよう。測量師はフリーダを愛しておらず、愛ゆえに結婚するわけではない、ということは明白であり、彼は彼女がとるにたらない、横柄な女性で、さらにはいかかわしい過去を持っているということを全く承知しており、それに見合った扱いをして、彼女をかえりみずにふらふらと出歩いている。これが事実である。今や彼は様々な方法で解釈されうるし、よって、K はか弱いとか、愚かとか、高潔あるいは粗野な男かのように思われるかもしれない。しかしこれらはすべて正しくない。真実に到達するのは、我々が彼の到着からはじまり、ここで指摘した彼の足跡を、フリーダとつながりを持つところまでたどるときである。[...] 彼にとってフリーダは全く重要でなく、すべては値段であるので、彼はフリーダに関してはあらゆる妥協ができるが、値段に関しては執拗に頑固である。さしあたりは推量や提案に対する嫌悪を除けば彼は無害だが、どんなにひどい思い違いと恥さらしをしていたかに気付けば、輪をかけてたちの悪いものになるかもしれない、もちろんそれも彼の矮小さの範囲での話だが。(SAB 272-273)

ここでは、序盤において何者でもなく、すでに「城が見えなくなって」もいた K について、その性格上の特徴が報告される。すなわち、城を目指すという行為をしなくなっても、K は K として同定される可能性がここで提示される。城の存在が K のアイデンティティーと関連づけてみられる傾向にあった『城』において、この現象はイレギュラーなものとしてとらえられる。作者であるカフカでさえもこの調書を K に「力でもって奪わせ」、さらにはこの非常に長い場面すべてをまとめて削除せざるをえなかったのである。さて、この調書の書き手はなぜ K がこのような性格上の特徴を持った人物であると報告できるのだろうか。ここで、調書の文面において特徴的な箇所をもう一度引用する。ここにおいて、再び評価とアイデンティティーの問題が浮上してくることとなる。

真実に到達するのは、我々が彼の到着からはじまり、ここで指摘した彼の足跡を、フリーダとつながりを持つところまでたどるときである。[傍点は筆者による]

¹⁸ 無理やり調書が奪い取られることは、このようにカフカの意識外で K のアイデンティティーが形成されることに対する、カフカ自身のとまどいあるいはためらいともとることができるかもしれない。この調書が再採用された箇所においてもまた、K はその内容の開示を強要するのである。

代名詞「我々 (wir)」はここにおいて明らかに異彩を放つ。『城』は基本的に三人称で語られるため、使われる代名詞が一人称となることは非常に稀なのである。Busseはこの箇所を「この代名詞 wir は受け手の審級、つまり展望を作り出す語り手への、そして読み方が指定されることによって引きずり込まれる読み手への、明確な参照記号を含意している」¹⁹ と評する。すなわち、ここにおいては調書の受け手が K について共に考えることが前提となって話が進んでいるのである。このことは次のことを示唆してはいないだろうか。すなわち、ここで K のアイデンティティーが提示されたのは、そこで解釈が行われたからであるということである。『城』においては、登場人物の評価は、解釈を行うことのできない地の文の話し手の代わりに話し、解釈する登場人物の間で行われざるをえない。実際、『城』においては *Erzählung* や *Geschichte* といった物語を話すモチーフが頻出し、登場人物たちはモノローグ調の長いセリフでもって会話するのである。²⁰ すなわち、ここでは、K について城の役人が評価を下し、それを評価の対象である K や他の読み手が受け取る、というプロセスを経てアイデンティティーの伝達がなされているといえる。ただし、この場面におけるアイデンティティーの提示は、前述の『城』における情報伝達方法の一つ、「調書」の持つ問題と一致する。モムスの調書は、文面上は相互的な解釈の可能性を提示しつつも、その実態は単に一方的な現実の押し付けにすぎない。この調書の読み手の解釈が、調書の書き手に届くという保証も事実もないのであるから。そしてこの K に対する解釈は、作品の他の箇所を読めば我々読者の目から見ても疑問を抱くようなものである。K 自身でさえも、調書の文面に関心はなく、関心を持つのは唯一、調書の書き手の判断の様子、あるいは人柄なのだから。モムスの調書は、したがって、あまりにひとりよがりであり、K のアイデンティティーを一義的に決定し、停滞に導いてしまった。

ただし、この調書の箇所は、表現の方法を改めることによって動的なテキストへと姿を変える。そのことを確認するために、この削除された調書が再採用された箇所を見てゆく。このモムスの調書の場面は批判版の第 9 章の終盤を構成するはずだったが、カフカの手によって線を引かれ削除された。カフカが一度削除した文章を後の筋書において再び登場させる傾向にあることは批判版カフカ全集の編者 Pasley も指摘したとおりだが、このモムスの調書の場面もまた例外ではなく、第 14 章において再利用されていると思われる箇所が出現する。使われる単語や言い回しを同じくして K の性格について語られるが、ただし、今度はモムスの調書として提示されるのではなく、特徴的なことに、フリーダの口から、橋亭のおかみガルデーナの言葉とし

¹⁹ Busse, Constanze: *Kafkas deutendes Erzählen. Perspektive und Erzählvorgang in Franz Kafkas Roman „Das Schloß“*. Münster 2001, S. 248.

²⁰ このことはすなわち、『城』作中におけるアイデンティティー形成が K 以外の登場人物についても起こっているということを示している。その形成の場である対話はほとんどが K を相手として行われ、また物語の語り手と K の距離が非常に近いので、K のアイデンティティー形成とほとんど同時進行で起こっているといえるであろう。

て語られるのである。この場面はKとフリーダの破局の契機となる決定的な場面であり、フリーダ、フリーダの話に登場するガルデーナ、そして当人であるKがそれぞれ自分のK解釈について語り、それに対して別の人物がさらに評価を下すという形式で発展してゆく。すなわち、登場人物同士の会話の中でお互いに影響を与え、与えられながら、それぞれが自分の考えるKのアイデンティティーを発展させてゆくのである。Kはここにおいても再び、モムスから調書を奪い取ったように、フリーダに話し始めることを「強要」する。

「これまでになんとなく」とフリーダは話し始めた。「いいえ、最初のときからですが、おかみさんは私にあなたの言葉を信じさせまいとして骨を折ってきました。[...] おかみさんはあなたの策略を見破ったそうです。[...] こうなったのは、あなたがわたしというクラムの恋人をわがものにし、それによって最高の値段でしか受けだせない担保をおさえていると思い込んでいるためなのです。この値段についてクラムと交渉するのが、あなたの唯一の目標なのです、あなたの目からすれば私なんか無に等しく、すべては値段にかかっているのですから、あなたは、わたしに関しては誰にでも譲り渡すつもりでいらっしゃるが、値段に関してはなかなか折れようとはなさらない、おかみさんはこう言うのです。」
(KKS 243-245)

「策略を見破る (auf Deine Schliche gekommen)」、「最高の値段でしか受けだせない担保 (ein Pfand, das nur zum höchsten Preise ausgelöst werden könne)」、「わたしに関しては誰にでも譲り渡すつもりでいらっしゃるが、値段に関してはなかなか折れようとはなさらない (hinsichtlich meiner zu jedem Entgegenkommen bereit, hinsichtlich des Preises hartnäckig)」などは、先に引用したモムスの調書の言い回しと一致しており、このセリフがモムスの調書の紙面上で主張されていた内容を口頭で言い直したものであることが明らかとなる。フリーダはおかみによるこのような意見を、自らの見地にに基づき最初は敵意を持って評価していた。

わたしはおかみさんを尊敬しているので、これまでどんなことでも聞いてきました。しかし、わたしがおかみさんの意見を頭から拒否したのはあのときが生涯で初めてでしたわ。あのときは、おかみさんの言うことがどれもあさましいと思い、私たちふたりの仲がどうなっているのか、まるでわかってくれないようにかんじられました。むしろ、あのひとの言ったことの正反対のほうが正しいような気がしました。(KKS 247)

ここで、フリーダには二通りの現実が用意されていることが分かる。一つは、ガルデーナの言うとおり、Kは自分の策略のためにフリーダを籠絡したのであり、フリーダをいつでも手放せる

担保としてしか見ていないということ。もう一つはKと自分は愛し合っており、Kがクラムに接近しようとしているのもすべてはフリーダのためであるということである。フリーダはここにおいてKに適用可能であった二通りの現実から片方を選び取った。その経緯をフリーダは次のように説明する。

でも、実際にはあなたがあの男の子と話しているのをきいてからはすべては一変したのよ。
[...] 突然、どうしてだかはわからないけれど、あなたがどういう意図であの子とはなし
ているのかに気が付いたの。(KKS 248-249)

フリーダはここで、おかみのKに対する評価を事実として受け入れるが、それはKとハンスとの会話を評価し、おかみが言うようなKの本性を導き出したからに他ならない。KはもちろんフリーダによるこのK解釈に反論する。

きみの言うことはある意味ではすべて正しい。まちがってはいない。ただし敵意があるよ。
[...] でも、教わることはあった。これからもおかみさんにいろいろと教えてもらえることがあるだろう。おかみさんはその他の点でぼくにやさしくはしてくれなかったけど、それを自分で直接ぼくに向かって口にしたことはなかったね。[...] でもフリーダ、考えてみてくれ、全部完全におかみさんの考えているとおりだとしても、それがひどいことだと言えるのは、このときだけ、きみがぼくを愛していなかったときだけだ。そして、もし本当にそんなことがあったなら、ほんとうにぼくは打算と計略できみを手に入れて、きみという所有物をだしにして暴利をむさぼっているといえるのだが。(KKS 249-250)

Kはここでガルデーナとフリーダの意見をうけ、接続するようにして、自分を弁護するために新しい解釈を打ち出そうとする。語りと評価が行われる場である会話において、Kのアイデンティティーは次々と更新されてゆく。Kがここでフリーダと自分の間の愛情を意識させたことで、フリーダはおかみのものとは異なる新しいK解釈を導き出すこととなる。

あなたに対して不信感をもったことなんて絶対にないし、こういった種類の感情をおかみさんがわたしにふきこんでいたとしたら、それを喜んでしりぞけて、跪いてあなたに許しを請うでしょうね。[...] あなたがわたしを信じてくれないのに、どうしてわたしはあなたに不信感を抱かずにいられるでしょう。それなら、わたしは完全におかみさんにつくわ。あなたが自分の態度のせいでおかみさんの言うことを証明していることだし。なにもわたしは、全部がそうだ、とまで言うつもりはありませんけど。だって、とにかくあの助手た

ちを追い払ってくれたのはわたしのためですものね？ (KKS 251-252)

フリーダは、おかみの打算的なだけの男という解釈と異なり、K を打算はあるが愛情のある男と解釈する。これは会話の中で K がフリーダに愛情を示したことによる変化であり、それ以前には、フリーダはガルデーナの示した K 解釈、すなわち、冷淡で打算的な男という解釈に迎合していたのである。したがって、モムスの調書が再採用されたこの箇所において、アイデンティティー形成は、より語り及び対話の中での形成という性格を強められていることが分かる。

このように動的な解釈が可能になった K のアイデンティティーは、会話の中で少しずつ変化してゆく。しかし、それがフリーダに対する K の自己弁護であるいじょう、それらは互いに矛盾するものにならざるをえない。このように、自分の解釈と異なる K の自己解釈に対し、フリーダはこのように言い放つ。

ものごとをしっかりと把握する (zurechtzufinden) のは、とても難しいことだわ、K。(KKS 251)

フリーダによるこの発言は、語る行為によるアイデンティティー形成の本質をついていると思われる。すなわち、アイデンティティーは「見つけ出す (finden)」ものであるということである。フリーダはここで描出されたガルデーナの K 解釈や K との会話から、そこに一貫する筋道を自ら見つけ、形成した。K は、モムスの調書で一方的に提示されたような、打算的ですがしこい男という評価から、愛情のある男へと変貌を遂げる。したがって、ここにおいては、K のアイデンティティーがそれを解釈する人物によって常に更新され続け、いかようにも形成されうるという可能性が提示されていると言うことができる。

ここにおいて、リクールのアイデンティティー論、物語的自己同一性との共鳴を指摘することはできないだろうか。リクールによれば、人間のアイデンティティーは、性格に代表されるように他者とのかかわりの中で自ら取捨選択形成し、共同体の中での位置付けを与えられながら形成され続けるものである。そもそも、人間が他者とのコミュニケーションをまぬがれえないいじょう、アイデンティティーはそのような動的なものにならざるをえない。実生活において、人はたえず、K に代表されるような『城』の登場人物たちのように、他者の解釈に接し、そこから影響を受けるはずである。加えて、カフカが危惧するのは、他者にアイデンティティーを押し付けてしまう、あるいは他者にアイデンティティーを押し付けられてしまう可能性であった。であるからこそ、『城』の世界では、一方的な判断の押し付けはことごとく失敗に終わってしまう。作者であるカフカ自身が、語る行為 (Erzählen) と判断 (Beurteilen)、そしてアイデンティティー (Identität) の持つそのような関係性に最終的に気が付いていたかは裏付けできないが、少なくとも『城』においては、一方的な押し付けが行われた箇所は削除され、会話の

形で再採用されている。アイデンティティーはあらかじめ決まっているものを受容するのではなく、人物同士の対話の中で絶えず更新されてゆくものとして提示され直されているということができるのである。

結論

このようにして、カフカの『城』においては、他者性と物語を媒介して形成される物語的自己同一性と言うべきアイデンティティーが形成される過程が描かれていることが明らかとなった。草稿の人称書き換えによって生み出された「キャラクター」である K は、何者でもない人間として村に到着しながらも、他の登場人物との交流の中で K として同定、形成されてゆく。ひとりよがりな判断に対する危惧は、作中において対話という形で克服されるのである。

K が本当は何者であったのか、今まで多くの研究者がこの問に取り組んできたが、『城』において実際、その問題を考えても徒労に終わるだろう。多くの矛盾しあう「事実」の中から、本当の「事実」を選び出すことは不可能なのであるから。むしろ、K はこれから K として同定される人物として城村に到着する。K が過去に何者であったかはもはや問題ではない。『城』において我々に提示されるのは、そのような内容的次元を超えた、現象としてのアイデンティティー形成の運動なのである。対話がそのような働きを持つとき、それはカフカ作品の多様な解釈可能性について、そして物語の登場人物だけでなく、今を生きる我々のアイデンティティーについて考えるうえでもひとつの指標となるに違いないのである。

Kafkas *Das Schloß*: Konversation und Identitätsbildung

ISHIGAMORI Miki

Franz Kafka hat sein ganzes Leben lang ständig mit der Vereinbarkeit von Familie, Beruf und seiner Tätigkeit als Schriftsteller gerungen. In zahlreichen Briefen und Tagebüchern diskutierte er den Akt des Schreibens, ein für einen Schriftsteller wichtiges Thema. Insbesondere im Verlauf der Entstehung seines Romans *Das Schloß* befasste er sich intensiv mit der Unmöglichkeit des Schreibens und der mit diesem verbundenen Gefahr des Urteilens. Forschungsarbeiten zu Kafkas Werken weisen oft auf die Verbindungen dieses Romans zu seinem wirklichen Leben hin und in der Tat scheint *Das Schloß* sein Problembewusstsein hinsichtlich des Schreibens widerzuspiegeln.

In diesem Werk kommt die Hauptfigur K. zunächst ohne einen klar identifizierbaren Charakter in ein Dorf. Für die Erhellung von K.s Identität ist daher Kommunikation ein wichtiger Aspekt. Im Roman werden Informationen zwischen den Figuren durch direkte Konversationen, Briefe und Protokolle ausgetauscht, aber eine Gegenseitigkeit des Informationsaustausches zwischen den Sprechern bzw. Sendern von Nachrichten und den jeweiligen Empfängern findet sich nur in direkter Konversation, nicht bei den Briefen oder Protokollen. Die „Wirklichkeit“ eines Ereignisses entwickelt sich in den Konversationen erst allmählich durch wiederholte Interpretationen der Charaktere. In den Briefen und Protokollen dagegen, die keine Antwort eines Anderen voraussetzen, findet eine solche Entwicklung nicht statt.

In vielen früheren Studien wurde darauf hingewiesen, dass K. die Fähigkeit besitzt, die Welt zu interpretieren und zu deuten. Der Versuch, die Identität in einem Ereignis zu finden, also über die Wirklichkeit zu urteilen, verlangt jedoch die Kommunikation mit anderen. Die Fähigkeit, die Wirklichkeit zu beurteilen, ist kein Vorrecht der Hauptfigur K., sondern die übrigen Figuren des Werks besitzen sie ebenfalls. Eine Ausnahme, bei der es nicht zu einer solchen Kommunikation kommt, bildet die Episode mit Amalia. Diese hätte zwar versuchen können, in direkter Konversation auf die falschen Vorstellungen der Dorfbewohner über sie und ihre Familie zu reagieren oder sie zu widerlegen, doch verharrt sie in Schweigen und

bringt damit letztlich ihre Familie zu Fall. Kafka zeigt hier, wie eine einseitige Auslegung der Wirklichkeit zur Ursache des Scheiterns wird.

Ein weiteres Beispiel dafür, dass Identität nur durch wechselseitigen Interpretationsaustausch, d. h. durch Konversation, hergestellt werden kann, ist das Protokoll von Momus. Auch hier wäre vielleicht die Etablierung von Identität an der einseitigen Auslegung von Wirklichkeit gescheitert. Wohl aus diesem Grund hat Kafka diese Passage schließlich gestrichen, ihren Inhalt jedoch auf andere Weise „aufgehoben“. Das, was ursprünglich im Protokoll stand, wurde zu einer Aussage der Wirtin, über die sich K. und Frieda unterhalten. In den gegenseitigen Fragen und Antworten, die zwischen K. und Frieda hin und her wechseln, kann die Identität K.s nun Schritt für Schritt entwickelt werden. Dies konnte für Kafka nur durch eine Konversation bzw. eine wechselseitige Interpretation geschehen, nicht durch die einseitige Auslegung von K.s Identität in den Aussagen einer einzelnen Person. Für das Verständnis dieses in *Das Schloß* auftretenden Phänomens ist Paul Ricœur's Konzept der narrativen Identität hilfreich, das davon ausgeht, dass die menschliche Identität sich durch das Medium der Andersheit und der Erzählung stetig erneuert.